

令和6年度 奈良市立富雄北幼稚園 研究実践概要

園長名 天目 淳子
全園児数 19 名

1. 研究主題

豊かな心をもち、意欲的に活動する幼児を目指して
～夢中で遊ぶ環境の工夫～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

園児数が19名の小規模園であり、遊びの中で刺激が少なくいつも同じ遊びをしていたり長続きしなかったりする姿がある。そこで、夢中になってとことん遊べる環境構成や遊びが面白くなるように援助する保育者がいることで、子ども達が夢中になって遊ぶようになるのではと考えた。

継続して遊べるよう、時間を確保し、発達段階に応じた援助をしたり、いろいろな経験を積むことができる保育内容を計画したりすることが大切であると考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児一人一人に応じた環境の工夫や保育者の援助のあり方を探る。

②研究の重点

- ・小規模園の現状から利点を考え、利点を活かした環境構成や保育内容の充実を図る。
- ・幼児の姿や言葉から興味や関心を見取り、幼児が遊びを展開していける環境構成や援助のあり方を探る。
- ・職員間で保育を振り返り、共通理解を図る。

③活動の方法

【事例1 : ほし組さんみたいになりたい! 4歳児 5月下旬】

ねらい ○自分の好きな遊びを十分に楽しむ。

5月下旬より「いろいろな色のジュースをつくりたい」と言って色水遊びが始まった。最初は保育者が用意した透明のカップにクレープ紙を入れてストローで混ぜて色が出ることを楽しんでいった。クレープ紙がなくなり、ジュースがつかれないなど困っていると、横にいた5歳児が花を持ってきてすり鉢をつかって色水をつくっている姿を見つけた。保育者が「ほし組さん、お花でジュースをつくっているね。一緒にやってみる?」と声をかけると、「ほし組さんみたいになりたい」と言って5歳児が使っている道具を探しにいった。5歳児の姿を見ながら花をすり鉢に入れて混ぜてみるが色が少ししか出ず、何度も5歳児のすり鉢と自分のすり鉢を



見比べていた。保育者が「Aちゃん、きれいな色だね。どうやってやったの？」と声をかけると「花びらをつぶしながら混ぜたらいいんだよ」と教えてくれた。保育者が「B君、つぶしたらいいんだって」と声をかけると、B児は、すりこぎで花びらをたたき始めた。すると、5歳児のようにきれいな色が出てきた。B児はできた色水を透明の容器に移し替え、「ミカンジュースできました～」と喜んでいた。

<反省・評価>

5歳児と一緒に遊ぶことで、新しい道具と出会い、今までとは違う方法でジュースをつくる楽しさに気付くことができた。遊びに使ってもいい花を近くに植えておいたことで、自分たちで選んで使いたいと思う分だけ使うことができた。また、保育者が一緒に遊ぶ中で、子どもの思いに気付き、声をかけたりやり方を伝えたりすることで遊びが続くきっかけとなった。

【事例2 : もっと流そう 5歳児 6月～7月下旬】

ねらい ○いろいろな用具や自然素材を使って試したり、工夫したりする。

暑い日が続き、園庭ではトイを使った水遊びを楽しんでいた。毎日繰り返すうちに、トイのつなぎ方がうまくいき、長いコースができた。ワクワクしながら水を流し、最後まで水が届くと「やったあ！最後までいったで」ととても喜んでいて。片付けの時間になり、「これ壊したくない」「もっと流したかった」と子ども達のつぶやきを受け止め、トイを残しておくことにした。

翌日、子ども達はすぐに昨日残しておいたトイのところへ行き、遊び始めた。水を流していたA児はトイに石ころを置き、水を流した。しかし、石ころは流れず、今度は泥団子やテープ芯など別の物を探してきては試していた。「面白そう！先生も流してみたいなあ。」と近くにあった桜の葉をトイの上に置いてみた。A児が「僕が流したるわ」と水を流すと勢いよく流れていった。その様子を見て、B児が「すごーい！僕もやってみたい」と葉を流して遊び始めた。A児とB児は保育者と同じ桜の葉を流すと、スルスルと流れたので、「もう一回！」と言って、流れていった葉をもう一度取りに行き、繰り返し流していた。A児は葉が流れるスピードを楽しみ、もっと早く流したくなりさらに勢いよく水を流した。すると葉が流されてなくなったので、今度は違う落ち葉やドングリの葉などを見つけ、流すようになった。A児とB児が違う種類の葉を持ってきて流しているうちに、A児はより大きな桜の葉を持ってきて流したが、トイにくっついて流れなかった。B児は、その様子を見て、「大きすぎるんじゃない？」と気付き、ちょうどよい大きさの葉を見つけて「これは絶対流れる！」と試す事をワクワクしていた。その後、重さの違いで流れが変わる事に気付き、葉に枝や石を付けて船をつくらせて試したが、つける素材によってはうまく流れなかった。その後も、トレー皿やペットボトル等素材を変えて船をつくりより流れるにはどうしたらいいかを工夫して遊ぶ姿が見られた。



<反省・評価>

・トイのコースをそのままにしておいたことで、やりたいことをすぐに遊び始めることができた。それにより、船のような葉流し遊びが継続し、どのようなものがより流れるのか試行錯誤しながら遊ぶ姿につながっていったのではないかと思う。

・保育者も遊びの中に加わり、子どもにヒントとなるような気付きをさりげなく知らせ

たり、子ども達がしたいと思っているがうまくできないことを手助けしたりする事でさらに遊びの幅が広がった。



【事例3： 何に使おうかな 4歳児 10月中旬～11月下旬】
ねらい ○秋の自然に親しみ、遊び取り入れようとする。

全園児でドングリを拾いに園外保育へ行った。たくさん落ちていたドングリを見つけては、「大きいドングリあった」「赤ちゃんのドングリもある」「帽子つきや」「緑色のドングリもあるな」と気がついた事を、保育者や友達に話しながら拾っていた。袋いっぱいにしたドングリを園に持ち帰り、籠に全員の拾ったドングリを入れた。たくさんドングリが入った籠を見て「何に使えるかな」「ドングリスープにしようかな」「製作にも使えそう」とイメージをどんどん膨らませ、何に使うかみんなで話し合った。



早速その日の遊びから、砂場の料理にドングリを使ったり、トイで転がしたりと思いつきの遊びに使っていた。また、保育室でも「ドングリコースをつくろう」と箱を切って貼り合わせてコースをつくってドングリを転がしたり、大きな段ボールの上にたくさんのドングリを転がして音を楽しんだりしていた。毎日、籠の中のドングリをみて、「まだまだ遊びに使えるな」と今度はどんな遊びにしようかなとワクワクしている様子が伺えた。



また、別の日には、保育室にある本を見ていた子が、「先生、ドングリがサンタクロースになっている」と知らせに来た。他の幼児に知らせると、「つくってみたい」と言っていた。ドングリの他にもマツボックリや木の枝など、子ども達がお家の人と一緒に拾ってきてくれた自然物がたくさん保育室に集まったので、サンタクロースやトナカイ、雪だるまなど自分がつくりたいものをつくることにした。自然物を使って楽しんで製作しながら、クリスマスを楽しみにする姿がみられた。



<反省・評価>

みんなでたくさんのドングリを拾ったという感動経験をした事で、秋の自然物に興味をもち、自然と遊びの中に取り入れる姿へとつながった。自分たちが拾った事で、「こうしたい」「これに使いたい」という意欲へとつながった。材料が豊富にあった事で、いろいろな遊びや製作に存分に使うことができた。

【事例4：Aくん10回跳べたで！ 5歳児 11月～1月下旬】
ねらい ○目標に向かって繰り返し取り組み、挑戦しようとする。

全園児で毎週月曜日に体を動かす時間（きらきらタイム）を実施している。11月からは、チャレンジ表を利用してみんなで縄跳びに触れる時間を設けた。また、クラスで縄跳びタイムをつくり、継続して縄跳びに取り組めるようにしてきた。

12月中頃、B児が連続跳びをできるようになり、それに刺激を受けたC児が何度も練習し、数日後跳べるようになった。その様子を見ていたA児は、焦って縄を回す手やジャンプするリズムが早くなってしまい、なかなか連続で跳べなかった。焦らずリズムよく跳べるよう意識しながら、保育者と一緒に何度も練習を行なった。

1月中旬頃、2学期に継続していたリズムのジャンプで2回連続前跳びが出来るようになり、「3回跳べたらシール貼れる！」と意気込んでいたが、なかなか3回跳べずにいた。「もう、しんどい」と挫けそうになっていたが、保育者や周りの友達から励まされ、1月末に3回連続で跳ぶことができた。保育者が「A君、3回跳べたよ！」と周りの幼児に知らせると、「すごーいAくん！」と声をかけてもらい嬉しそうにしていた。その日に5回、9回と連続で跳べるようになり、A児は満足気な表情をしていた。その後、10回跳ぶことができ、「先生ー！Aくん10回跳べてんでっ！」と友達が嬉しそうに知らせにきた。他の幼児もたくさん跳べるようになったり、色々な跳び方や2人跳びをしたりしているのを見て、「僕もやりたい」「Dくん一緒にやろう」と誘い、「いいよ」と二人で新しい跳び方に挑戦しようと楽しむ姿が見られた。



<反省、評価>

- ・縄跳びに対する個人差が大きかった為、一人一人のできることや苦手な部分を探り、段階を踏んで取り組めるような表にした。また、全員がシールを貼ることができるように確実にできる項目を設け、意欲が削がれないように配慮した。そして新たな跳び方をしている子も交差跳びや二人跳びなどを書き足せるようにしている事で、より新しい跳び方に挑戦し、楽しみに取り組む姿につながった。
- ・友達が跳べるようになっていく様子に刺激を受け、自分も跳べるようになりたい、シールを貼りたいという気持ちが強くなり、継続できる力となった。

5. 研究の成果

- ・園児数が少ないので普段から4歳児と5歳児の関わりが多い。4歳児にとって5歳児は憧れの存在であり、毎日関わりながら過ごす事で「5歳児はこんなことをしていた」「僕たちもやってみよう」と刺激をもらいながら4歳児なりに遊びを進めていく姿につながった。
- ・きらきらタイムでは、少人数のため、全ての遊具にじっくりと取り組む事ができた。また、保育者が一人一人の姿を把握する事ができるので、その子に合わせたカードをつくる事ができた。その結果、楽しみながら意欲的に取り組み、自信へとつながったと考える。
- ・素材や材料との出会うきっかけを常に保育者がつくっていく事で、子ども達の知識の積み重ねになり、それが遊びの広がりにつながったと考える。
- ・子ども達と遊びの振り返りをする事で、子ども達がしたい事を保育者と共有する事ができ、明日への目的が明確になると考える。そうする事でより遊びの意欲へとつながると感じた。
- ・職員間で子ども達の姿を話し合う事で、多角的に子どもの姿を見取る事ができると感じた。

6. 今後の課題

- ・今後も保育者間で子ども達が今何に興味をもっているか話し合いながら環境構成や援助を見直していきたい。
- ・子どもの遊ぶ姿を通して経験や学びを保護者に伝え、保護者も巻き込みながら啓発していく事に努めていきたい。